

国土審議会北海道開発分科会第6回計画部会 議事概要

- 1 日 時：平成27年10月23日（金）13:00～15:00
- 2 場 所：経済産業省別館3階312号会議室
- 3 出席者：[委員] 大内部会長、中嶋部会長代理、石田委員、片石委員、神田委員、小磯委員、田岡委員、田村委員、西山委員、長谷山委員、林委員、町田委員、宮谷内委員、山田委員、山谷委員（代理：総合政策部佐々木担当局長）
[国土交通省] 岡部北海道局長、田村大臣官房審議官、池田大臣官房審議官 ほか

4 議事次第

- (1) 開会
- (2) 議事
 - ① 新たな北海道総合開発計画に関する計画部会報告（素案）について
 - ② 秋期に開催した「北海道価値創造パートナーシップ会議」等の開催状況について
 - ③ その他
- (3) 閉会

5 議事及び主な発言内容

- ・ 新たな北海道総合開発計画に関する計画部会報告（素案）について
- ・ 秋期に開催した「北海道価値創造パートナーシップ会議」等の開催状況について
資料2から資料3-3までについて事務局から説明し、意見交換が行われた。
- ・ その他
資料4について事務局から説明し、スケジュールについて確認された。

【委員からの主な意見など】

（全体的な御意見など）

- ・ 過去のトレンドの延長上の取組では不十分であるということがひしひしと伝わる必要があるのではないか。その一環で、例えば、13頁の「世界水準の価値創造空間」の「世界水準」の意味の明確化を考えてほしいし、14頁の「世界に目を向けた産業」の「世界に目を向けた」も、今でも世界に目を向けていることは事実であることから、もう少し踏み込みの強いニュアンスを記載することを考えてほしい。
- ・ 電気、水道、ガスなどについて、全て他地域よりも割高という状況が続くことで本当によいのか、という問題意識を持つことが必要ではないか。
- ・ 北海道総合開発計画と「車の両輪」となるような位置づけのものとして、今後、地方ブロックの社会資本整備の計画についても作成作業が進められるものと思うが、社会資本整備の関係では、趨勢が、既存ストックのもたらす効果の最大化、とりわけ、「賢く使う」というような方向になっている。これと「ミッシングリンクの解消」とを如何に整合させるのか。量的なものから質的なものへの転換という考え方・メッセージを示す方もおり、単にミッシングリンクを解消という表現だけでなく、新たなステージのインフラをつくるというニュアンスをどこかに記載すべきではないか。
- ・ 「国土形成計画」の方で、中央リニア新幹線等のプロジェクトを中心とするスーパー・メガ・リー

ジョンの考え方がある。その枠組では、北海道は北海道新幹線の整備を受けて一つのエリアとして整理されるイメージであるが、ロシアとのつながりなども見据えて、例えば、北海道新幹線についても本当に札幌まででよいのか、というような論点が考えられる。道東・道北のように道央圏から離れたエリアから衰退していくような懸念がある中で、国からは難しくとも、北海道から、そうした提案もなし得るのではないか。この計画において文言として明示するかどうかはともかく、少なくとも、背景としてそうしたことも踏まえているということでないか、今後、札幌オリンピック・パラリンピックが誘致されたといったような場合に、この計画が霞んでしまうのではないか。

- ・ 圏域ごとに見て、これからの10年において、人口減少などを含め、どのようなことが具体的に起きてくるのかを必死に考えていくことが必要。パートナーシップ会議で、地域において努力している方は多数おられたが、全体として人口のパイは減るわけであるから、全体として自治体の元気がなくなるということは考えにくく、コンパクト化の推進、「選択と集中」を通じ、よりがんばって人口の受け皿となる地域と、がんばりはしたけれども人がいなくなる地域が出てくることになるのではないか。そういうことを十分に認識して、地域をどのようにしていくのかを皆がきちんと考えなければいけないのではないか。即地的な地域の方向性は国ではなく地方公共団体が描きつつも、地域がよりがんばるための道具立てを、この計画の中に更に入れ込む工夫ができないか。
- ・ 基礎圏域、生産空間等の概念について、生産空間に居住している者においても、地方部の市街地等との一体感を持てるよう、更に分かりやすくするための表現ぶりの工夫をお願いしたい。
- ・ 基礎圏域について縷々記載しているが、過去、後志総合振興局管内では市町村合併はまったく進まなかった。一部の事務を広域連合で取り組んでいるが、また異なった概念がでてきて、本当にうまく進むのか危惧している。市町村合併のメリット・デメリットも整理し、踏まえておく方がよいのではないか。
- ・ 基礎圏域の面的な広がりについて、生物多様性などの環境の側面も考慮してはどうか。
- ・ 「北海道価値創造パートナーシップ」と、一般論としての「プラットフォーム」との異同が明確でないので、整理してほしい。
- ・ 北海道開発局の地域づくり関係の会議に参画しているが、地域で実践を進めていきたいという意見を多く耳にした。16頁の「人」への着目の部分が、一層力強い表現になることを期待したい。
- ・ 17頁に「北海道価値創造パートナーシップ」に係る記述があるが、計画策定プロセスとしてではなく、計画により推進される具体の施策として見ると、意味合いが明確でないように見える。例えば、基礎圏域における施策展開のツールとするといったことや、従来からの6圏域での施策展開に活用するといったことも考えられるのではないか。
- ・ 石狩市では、総合計画の策定に際し、人口面では現状維持を想定した。このところ、若干人口が増えた（流入した）が、増加に転じた実感はない。やはり、国において税制や社会保障制度の面を含め、大きな方向を示してほしい。
- ・ 札幌の東京化が北海道の特徴的な魅力を下げた面もあるように感じており、19頁に「北海道スタンダード」の記述があるが、改めて徹底的に北海道にこだわる考え方を進めることも期待したい。
- ・ 21頁の基礎圏域について、医療圏ベースで作って終わり、ということになってしまわないかと懸念する。また、税制や諸制度の構築を含め、基礎圏域の事業を立案するというような、これまでにない程度に前向きな姿勢を示してもよいのではないか。
- ・ 27頁の縄文文化の関係の記述と関連するが、我が国の一部エリアにおける特質を世界文化遺産に

取り上げてもらうべく活動していくことの困難性に直面しており、今のまま記載してよいものか、少し危惧している。

- 27 頁に関わるが、蘭越町では、現在、高校生に対する就学支援をするなど、苦心して取り組んでいる。可能であれば、人材育成の関係主体として、高校も明示できるとよいのではないか。
- 27 頁とも関わるが、大学への進学に際し、首都圏に人口が流入しないようにすることが地方の立場からは重要ではないか。大学の分散立地が緩和され、首都圏に大学の立地が集中するようになっている。この計画において、高等教育機能を強化・育成することに関する問題意識を示してほしい。
- 27 頁とも関わるが、室蘭工大、北見工大、道内の高専、北海道、道経連等が協力する取組として、文科省の「知の拠点整備事業」に採択された。目標は端的で、卒業生に如何に地元就職してもらうか（地元就職率の向上）ということになっている。大学は、その一環として、地域の産業振興にも貢献していくこととなっており、そうした役割も明示していただけないか。
- 30 頁にある T P P についての記載とも関わるが、如何に対処するかとともに、グローバルな経済の中で如何に活かしていくかという観点も必要ではないか。
- T P P に関連しては、北海道総合開発計画の中で位置づけられるものとして、生産基盤の整備や、ロジスティクスの高度化について記載できるのではないかと考える。
- T P P との関係で、農業関係者の不安が多いように認識している。この計画に農業関係の記述をして頂いているが、具体的にどう進めるかは非常に大変だという印象。農業人口が 10 年後にどうなっているか、離農者が出た際に、北海道では受け皿の産業が乏しいのが実情。集落コミュニティが崩壊しないかと危惧している。
- 本当にこの計画によって、北海道の G D P を増やせるのか、期待できるのかと危惧している。
- イタリアなどで農村景観や食を活かした取組が活発に展開されていることに鑑みると、27 頁のソーシャルビジネス等の記載や 34 頁の農山漁村の活性化の記載に、食育などのもう少し具体的な内容を入れてもよいのではないか。
- 35 頁の観光地形成との関係で、ランドマークがあるわけでない「通りすがりの秀逸な風景」を発信し、探しにってもらえるようにする工夫が必要ではないか。
- ミラノ万博における多様な観光客の受入れの取組を目の当たりにした印象、ミラノ万博に出展している事業者から食の輸出における壁の高さについての意見を伺った経験からすると、33 頁の食の海外展開のくだりや、36 頁の記述をもう少し力強い表現にできないかと考える。
- 「会議ビジネス」が諸外国で展開されつつある。観光面での効果もあり、国や北海道が主導する形でよいので、是非進めてほしい。
- 39 頁のデータセンターの関係では、ラストワンマイルの整備が十分でないこと、送信容量の余力の少なさ、もはや気温が利点とならないこと等の事情から、先般、石狩市として誘致がうまくいかないという実際の経過があった。
- 40 頁の産業集積に係る記述との関係で、石狩市において、超伝導の実験などを進めているところである。広大な北海道のフィールドの中でも、既存のベースのあるところを活かしてほしい。国の予算面での措置が終わるとそれで終了というのは惜しいと考える。
- 44 頁のグリーンインフラに関連するが、その考え方の中に防災の考え方をも取り込むことができないものかと考える。
- 45 頁の 6 行目以降に「木育」とあるが、パートナーシップ会議では、高校生や中学生を受け入れ、農業や漁業の体験をしてもらう取組をしている方から、受け入れた若者が北海道のファンになって

もらえるという意見を伺った。教育面での農業の効果なども言及してはどうか。

- ・ 「地球温暖化問題」(46頁以下)との関係で、良い傾向と悪い傾向のいずれも顕著に出るのが北海道であるにもかかわらず、非常に意識が低いのではないか。
- ・ 観光、災害対応、老朽化対策といった観点で、物理的な移動のデータが社会的価値を創出する可能性を感じた。なお、もう少し、観光でのデータの利用についてももう少し記述できるように思われる(例えば、各種ツーリズムの記載があるくだりにも情報についての記載を追加するなど)。また、インフラ老朽化の関係で、人材が減る一方で、個々の人材の知るべきことが増加することになると思われ、単に研修の回数が増えればよいということにならないように記載ぶりを工夫してほしい。
- ・ 先般の鬼怒川流域等での水害との関係で、調査団として現地に赴いた折の知見であるが、高速道路の区域を河川用の防災資材の設置場所にできないかと考える。被災地に資材を運ぶ際にも効率的である。
- ・ 北海道では総合計画を作成中であるが、実効性を確保してほしいとの意見が多く、国とも密接に連携していきたい。また、人口減少に対応するため、北海道経済連合会にも関与していただきながら、北海道創生会議を設置して議論を進めている。新たな北海道総合開発計画においては、北海道型地域構造の保持・形成、北海道の価値創造力の強化に資する諸施策に期待している。
- ・ 「世界の北海道」を掲げている今回の計画との関わりでは、札幌市として、「生涯現役として輝きつづけるまち・さっぽろ」等の将来像の実現を図ることとしており、今回の北海道総合開発計画と同じ思いで取組を進め、北海道全体の推進エンジンの役目を果たしたい。また、食や観光の観点では、札幌の都市機能・北海道全体のショーケース機能と各地域の地域資源を融合させるなど、北海道全体の魅力向上に繋げていきたい。「人」への着目の観点では、21の大学があるという環境を活かし、北海道全体の発展へと繋げたい。

(個別的な文言修正の御意見)

- ・ 13頁にアイヌ文化についての記述があるが、北海道唯一の国宝は縄文文化関係の文物であるし、また、オホーツク文化の歴史もあることから、どこかで、そうしたアイヌ文化以外の文化についても言及してほしい。
- ・ 14頁について、可能であれば、製造業についても言及してほしい。
- ・ 16頁の26行目について、「こうした「価値創造力」は、北海道民の官依存体質を廃し、北海道民の当事者意識を高めるものであって、…」といった形で記載してはどうか。
- ・ 19頁に「広義のイノベーション」(1行目)とあるが、シュンペーターの言説に従えば、より本来的な意味でのイノベーションを指しているのではないか。表現ぶりを検討してほしい。
- ・ 19頁の10行目に、北海道のインフラや地域資源の最大限の活用という見地から、「ミッシングリンクの解消」を明示すべきではないか。
- ・ 19頁の31行目に「効果的な進行管理を図るため」モニタリングを行うと記載されているが、進行管理そのものが目的なわけではないため、「進行管理を図り、確実に施策を推進するため」といった追記をすべきではないか。
- ・ 21頁の11行目に「モデル的な圏域を設定」とあるが、第16回北海道開発分科会での委員の指摘にある、モデルケースという意味合いと、この表現とは相違するのではないか。過去の北海道開発行政における圏域行政の歴史・経緯に鑑みれば、現実には施策展開を図るに際してモデル事業から着手することはあっても、計画のメッセージとしては基礎圏域を全体として施策展開を図るという前

向きな意思表示を明確にすべきではないか。

- 22 頁において、「生産空間」そのものが観光資源であるということを明示して頂けないか。生産空間において景観や食を体験することが重要であるとする。
- 27 頁の 12 行目に「北日本連携」とあるが、関東地方は含まれないのではないか。用語の整理をしてほしい。
- 30 頁の 13 行目に「農林水産業・食関連産業の振興」とあるが、「振興」という表現は弱いように感じられるため、例えば、「高度化」といった表現に置き換えることはできないか。
- 35 頁の 22 行目に「世界に通用する魅力ある観光地域づくり」とあるが、「世界に誇る」、「世界を魅了する」といった表現の方が今後の取組の目指す方向を志向するのではないか。
- 42 頁において、高速道路の IC 等から主要な拠点（空港、港湾等）へのラストワンマイルが直結していない現状にあることから、「直結」ということを明示して頂けないか。

(以上)

※ 速報のため、事後修正の可能性があります。(文責 事務局)